道しるべ

道徳通信

上尾市立太平中学校
道徳通信　第７号
令和７年12月24日(水)
発行者　校長　宮田　純生

コミュニケーションで大切にしていること

１学年職員

私は人とコミュニケーションをとる際に１つ大切にしていることがあります。それは「相手の目を見て」話をすることです。

私は左耳が聞こえないため、人の言葉を１度で聞き取れないことがよくあります。その弱点を補う方法として、相手の口元や表情をよく見て、相手の言おうとしていることや気持ちを理解しようと努めています。しかし現在は季節がら、マスクの着用により相手の表情がわかりづらくなってしまいました。表情を頼りに相手を理解しようとしている私にとって、この事態は深刻です。さらには、マスクにより声も通りにくくなっていますから、相手の言葉も耳に届きにくいのです。

人は、表情や話し方、しぐさなどの言葉によらない手段から、感情や意思を伝え合ったり感じたりします。私も、人とあいさつする時や会話をする時は「言葉」だけでなく、「視線や表情」から相手の気持ちや状態を感じて情報を補っています。

先月の１学年委員会では「あいさつを自分から積極的にする」取り組みを行いました。生徒の皆さんがこちらの目を見てあいさつをしてくれるだけで、私は存在が認められたように感じて嬉しくなります。「目を見て話す」ことは本当に「心を通わせて話す」ことなのだなと感じます。互いの表情を見ながらの会話は、気持ちも共有できて楽しく感じ、信頼関係も生まれると感じます。

私はこれからも、生徒や仕事で関わる関係者、同僚、ご近所さん、家族や友人などと、相手の目を見てコミュニケーションを図っていきたいと思います。

一輪の花

２学年職員

教師になって初めての年、家庭訪問があった。一軒一軒家を巡るのは楽しくもあり大変でもあった。Yuka さん（仮名）の家は小さな家だった。Yuka さんはおとなしい目立たない子で、普段ほとんど私とは会話したことのない子だった。居間に通されたとき、中央に小さなテー物があった。そのテーブルの上に小ビンが置いてあり、そこに一輪の花がさしてあった。道端に咲いている黄色い花だった。Yuka さんが私のために摘んできてくれたのだ。その気持ちがとてもとてもうれしかった。一瞬目が潤んでしまった。豪華な花を飾ってくれたり、高価な菓子を出してくれたりする家庭もたびたびあった。でも、それより Yuka さんが摘んできてくれた小さな花が何よりも心に残った。あれから何十年もたった今でもその花は枯れることなく、この心の中に咲き続けている。今頃 Yuka さんはどんな女性になっていることだろうか。

あなたが望むものは？

３学年職員

私は、現在３学年の担当教員として勤務している。自分の中学３年生の時代を思い返しながら生徒と対話をすることもしばしばあるが、今回は私が中学３年生の際に大流行した曲を紹介したい。それは、SMAP というグループが歌った「世界に一つだけの花」という曲だ。**「Ｎｏ１ にならなくてもいい　もともと特別な Only １」**という歌詞は、当時の日本社会では、あまり浸透していなかった多様性の大切さを伝えるものであった。

それから約２０年経った現在、私の二人の娘がよく口ずさむ曲がある。**「どんどんのめりこんで　この世界は誰もが人ぞれぞれ」**これは、NHK の教育番組の主題歌であり、多くの幼児年代の子どもが知っている曲であるが、この曲の最後はこう締めくくられる。**「違っていても　それもいいね」**この曲も多様性の大切さを意味したものになっている。

私はこのことから２０年経っても、多様性について歌っている曲は、浸透しやすく、やはりその考え方は重要なのだなと思う。その反面、みんながみんな自分らしさを主張してばかりの世の中は、本当にみんなが望むような素晴らしいものになるのか、疑問にも感じる。「①どんな自分らしさでも認めてくれるように世の中が変わること。②世の中に合うように自分らしさを変化させること。③それとも・・・」あなたは、どれを望みますか？

保護犬・小太朗から学んだこと

さわやか相談員

我が家は、今年の２月に保護犬を迎えしました。実は、１月末に実家の愛犬が天国へ旅立った直後だったので悩みました。しかし、犬猫の寿命を考え、里親の年齢制限が５５歳だと知り、私の年齢がラストチャンスだと感じ覚悟をもって里親になりました。実は急速に少子高齢化が進んでいる日本で飼育されている動物たちにも、しわ寄せがきているのです。飼い主が高齢のため、途中で病気になってしまい飼育放棄してしまうケースがとても多いという事情を知り、心が締め付けられました。保護施設にいる動物の内訳は９割が猫、１割が犬、時々、鳥やウサギ等の小動物も預かるそうです。小太朗は 2023 年４月 23 日に熊谷市で生まれました。この年の８月に大手ペットショップで販売されていた小太朗に一目ぼれして購入した元飼い主。その元飼い主は、１年４か月間だけ可愛がりその後、飼育放棄したのです。とても、せつなくなりました。飼育放棄をされた小太朗は、庭に放置されお腹がすいて１日中吠えていたそうです。その鳴き声を聴いた近所の方々が命をつなぐために、順番に餌を与えてくれました。その話を聴いて涙が出ました。近所の方に愛されていた小太朗の飼育を引き継ぎ、初心を忘れないよう心掛け小太朗と暮らしています。２月から小太朗と暮らし始めて、改めて気づいたことがあります。犬は、愛と忠誠心を持った動物です。小太朗は、アイコンタクトと鳴き声で会話します。私が家で携帯電話を使っていると、『僕と遊んでほしい！』と鳴いて訴えてきます。小太朗から学んだことは、『目の前にいる人との時間を大切にすること。』

太平中の皆さんは、動物たちからのメッセージを受け取って、どうしたら人と動物がお互いに幸せに暮らせる社会になれるか？是非、考えてほしいです。

さて、あなたには何ができますか？